

不忘山・B29 墜落事故に関する報告

(宮城県 横川出身)

高橋 昌平

平成 28 年 2 月 28 日 記

# B29が我が人生を決定づけた。

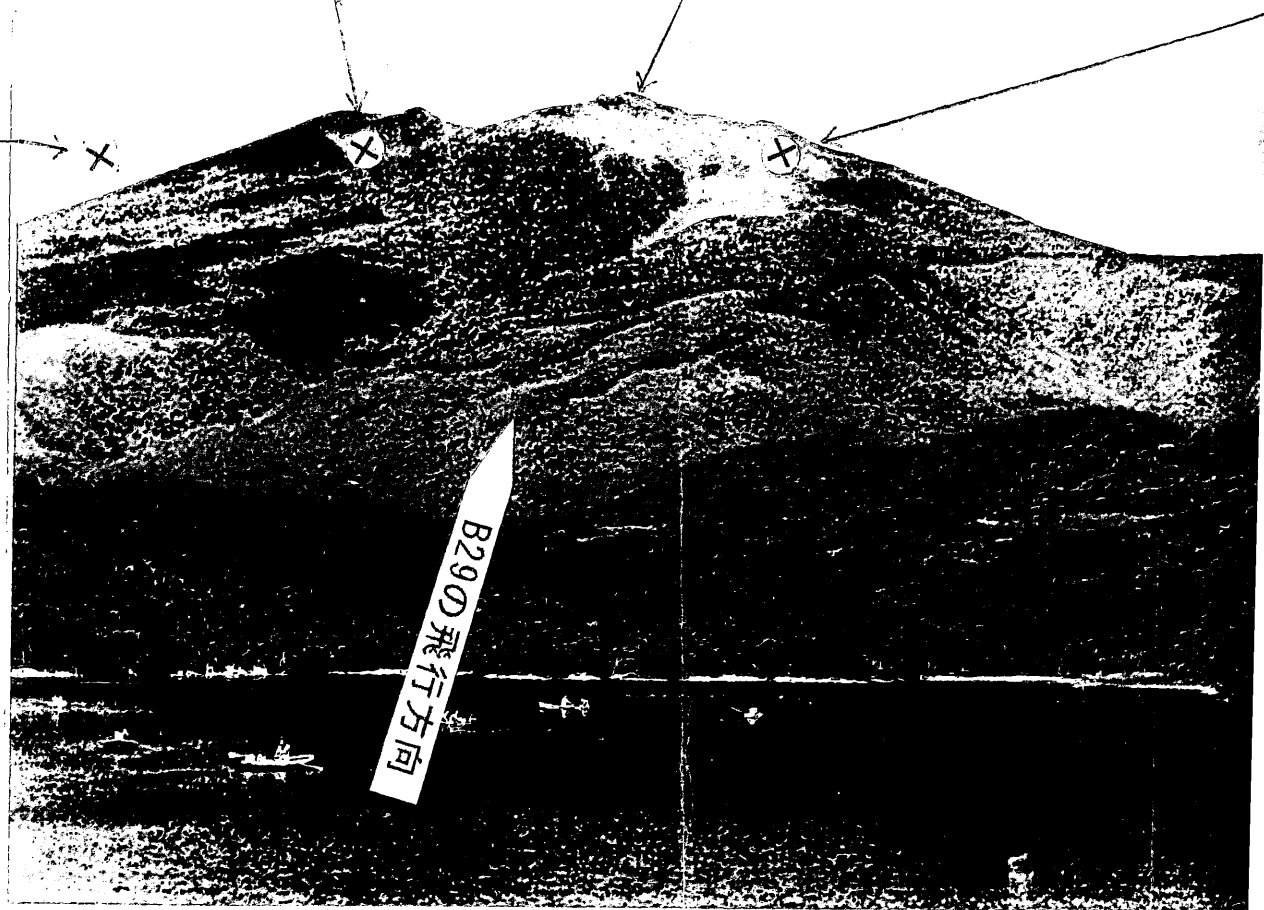
昭和20年(1945年)3月9日深夜から10日未明にかけて 不忘山(1,705メートル)に B29 3機が墜落事故を起こしそれが発端となって我が人生が決定づけられたわけだが、中でも特に印象深く記憶に残る事柄について記述しておきたいと考之満ちて迎えるにあたり最後の仕事としてまとめたものである。

不忘山のどこにどのように墜落したかは次の写真と鳥観図を見下されい。

2番機  
大若沢の頂上附近に正面から激突したところ残雪と瓦礫のなだれで残骸の殆んどが谷底に埋ってしまった。兵士を含め残骸の回収は殆んど不可能なところである。

(不忘山)  
標高 1,705 メートル

3番機  
空沢上流のぶな平に、ぶなの梢をプロペラで切りはらいながら林の上方に墜落した。周辺の枝には布切れやビニル片が多数ぶらさがっていた。



(長老湖から不忘山を望む)

墜落したかは 次の写真と鳥観図を見てください。

幾  
尺の頂上附近に正面から激  
とところ残雪と瓦礫のなだ  
残骸の殆んどが谷底に埋っ  
まった。兵士を含め残骸の  
は殆んど不可能なところで  
。

(不忘山)  
標高 1,705 メートル

1 番機  
尾翼部分は焼けず  
にそっくり残って  
いた。横川からも  
尾翼が光って見え  
た。兵士一人が暫  
らく生存していた  
らしく焼跡に落下  
傘をかぶって凍死  
していた。ここは  
一面瓦礫の傾斜地  
で、西風が強い吹  
きさらしのところ  
である。



(長老湖から不忘山を望む)

B29 が我が人生を決定づけた

1. 東京大空襲

(ヤカ島)

沖縄が既にアメリカ軍に占領されていた。その沖縄のアメリカ空軍基地から 1 日に数 10 機に及ぶ戦略爆撃機 (B29) が本土の主要都市への無差別空爆を行うようになった。

昭和 20 年 (1945 年) 3 月 9 日の夜半、日本の首都である東京に大規模な空爆が行われた。中でも木造家屋の多い墨田、江東、台東区を目標に大量の焼夷弾が投下され、一夜にして 10 万人以上が死亡したと推定されている。戦略のねらいは爆弾による破壊ではなく、高度千メートルの低空からの焼夷弾投下で住宅街を焼きはらうという作戦であったように思われる。この空襲によって市街は壊滅的な焦土と化し、多くの犠牲者が出た。あまりにも悲惨な情景は日本国民の戦意を喪失させ、敗北的な精神動揺を与えるのに十分な戦火であった。

2. B29 が不忘山に墜落

3 月 9 日から 10 日未明に B29 が 3 機横川上空に飛来した。東京大空襲に参戦したと思われる 3 機が高度千メートルのまま、岩手方面から帰途に向かっていたと推測されているが、その飛行進路に立ちはだかっている不忘山 (標高 1,705 メートル) の頂上付近に激突墜落したのである。その不忘山と墜落した位置関係を写真と見取り図に示してある。

1 番機、2 番機、3 番機と当時から仮称名で呼ばれていた。

この墜落したそれぞれの現場に行って直接この目で見てきたのでその状況を記憶をたどりながら詳しく報告する。

(註) 墜落現場を視した順番は 1 番機・2 番機・3 番機と決めた。

## 1. 墜落したその夜の出来ごと。

その夜の深夜0時から1時頃だったと思うが、突然大きな爆音がして目が覚めた。夜間にヒコーキの爆音など聞いたことがないので空襲だと直感した。布団の中でガタガタ震えて通り過ぎるのを待った。上空を通過し10数秒経った時、突然爆音が消えた。さらに数秒後2機目の爆音もピタッと消えたのである。

この夜は雲間が月明かり外は少し明るかった。しかし、風が強いので前日に降った雪が強風によって舞い上り吹雪の夜であった。爆音は2回しか聞いてないので2機のヒコーキに何事かが起ったらしい、と震えながら想像するしかなかった。

やゝ暫く経ってから隣家の佐々木清治氏が我家に来て、父と何やら話している。「どうやらヒコーキが不忘山に落ちたようだ！しかも山が火事のように燃えているのが見える！」と荒げた声で話している。音が2回したが2機とも落ちたんだろか、と父が問うたのに佐々木氏は「西風でよく聞こえなかったが乙森山（蛤山）の方からも聞こえたような気がする。」などと二人は大きな声であれや、これやと想像しながら一晩中話合っている所以この夜は殆ど眠れないまま朝を迎えた。

朝早くから村中の警防団員が走り廻って何やら話合っている。雪山で火事とはげせない！とにかく火事の原因を確かめる必要がある、とのことで猟師、警防団員、村の関係者10数名がそれを確かめるため燃えていたと思われる山へ登ることになった。

3月とはいえ雪深い山を登るのは容易ではない。標をはいた<sup>カジキ</sup>猟師、警防団員が先頭に立って雪路をつくりながら1番機目指して登ること約3時間、漸やく現場近くに到達した。目の前にピカピカ光るヒコーキの尾翼部分が現われる。

しかし、直ぐには近づけないと判断、猟師3名が手分けして三方から垂直尾翼をめがけて猟銃を発砲。しかし反応が全くないことを確認して近寄ってみると、ヒコーキの後部が焼けずにそっくり残っている。主翼を含む前方は焼け焦げて木端微塵となって広範囲に散らばっていたという。不忘山の東斜面で吹きさらしの最も強いところ、気温もマイナス20度以下と極寒の傾斜地で長居はとてもできる状況ではなかったらしい。

夕方、B29の残骸の一部を証拠として持ち帰り村中の人たちに報告された。まるで戦争に勝利したかのような村中大騒ぎであったという。

## 2. この目で見た墜落現場

### (1 番機)

この年の4月末頃だったと思うが宮城県警察本部と東北方面軍司令部合同の現場検証のため登山計画が成された。横川警防団がその準備にあたり、総勢100名以上からなる調査団が編成された。(私が高等科1年の時で、学校を休みこの調査団に同行することにした。)

当日は朝からよく晴れてはいるが西風が吹く寒い日であった。

朝8時横川を出発、ケッチャグラの沢を過ぎぶなの原生林を1番機目指して登り始める。4月末というのに残雪は1メートルもあって標をはいた警防団員が先頭に立って雪路をつくりながら一団は登る、我々外野の者たちは難なく歩くことが出来た。

服装は警察関係者、憲兵隊員、軍関係者は膝まである皮の長靴をはいている。村の関係者、我々外野の者たちは藁じに脚絆の冬支度である。2時間以上かかって漸く墜落現場に着いた。現場は吹きさらしの強いところで藁じは風を通すので、冷たいやら寒いやらとにかくガタガタ震えながら様子を見守るのがやっ

脛巾  
ほぼき

とである。警察関係者から、機体や残骸には近づかないよう注意される。少し離れた位置から見ているだけであった。水平翼と垂直尾翼、それに胴体の後方部分が焼けずにそっくり残っているので飛行方向が推測できる。現場は瓦礫が一面に広がるなだらかな傾斜面でゴツゴツした川原のような所、機体の前の方は強い衝撃でバラバラに壊われ焼けこげた残骸となって広範囲に散らばっている。

その中でも比較的平らな焼けあとに真白な落下傘の布が山と積まれているところがある。これを見た地元の人達がこれはなんだ！とばかりにスコップで取り除くと、毛布にくるまってうずくまった状態の兵士が現われた。軍服姿でカチカチに凍って凍死している。多分最後部に乗っていた兵士で墜落したときは生存していたことを示していたことになる。

警察の指示で散らばっている兵士を少し離れた窪地に集められた。全部で12体あったと思う。また、軍の関係者から焼けずに残っている印刷物や軍事に関するものはすべて軍部側に渡すよう厳重に指示されていた。とにかく一個所にとどまっているので寒くて寒くて長居のできる状況ではない。震えながらにぎり飯を食べ我々外野の者達は1時間も経たないうちに下山したのである。

(参考)

この調査団に女性として唯一参加した氏家はるさん（私より3才上）は、我々外野の者達と一緒に行動し男まさりの女性であった。

しかし、墜落現場の焼けあとに落下傘の布をかぶってうずくまっていた兵士を見たとき、「ギャー！」と倒れそうになったのを支えてやった記憶がある。兵士の顔はまるで生きていたかのような、若者の顔であったからだ。

もし、この時夏であったら多分、生きていただろうにと思ったものである。

この調査団  
うっすらと雪  
跡とに  
そこへ蓋  
その布を  
が現われ  
様子を見  
兵士の顔  
この時、  
もし、この  
12体は

進行方向が推測できる。現場は瓦礫が  
した川原のような所、機体の前の方  
に残骸となって広範囲に散らばってい

白な落下傘の布が山と積まれていると  
れはなんだ!とばかりにスコップで取  
た状態の兵士が現われた。軍服姿でカ  
部に乗っていた兵士で墜落したときは  
る。

し離れた窪地に集められた。全部で12  
ら焼けずに残っている印刷物や軍事に関  
重に指示されていた。とにかく一個所に  
のできる状況ではない。震えながらにぎ  
怪たないうちに下山したのである。

この調査団でスコップを持って参加人は高橋善治郎氏のみだった。  
うっすらと雪で被われた落下傘の布(高さ40~50センチ)が焼けて  
跡とあるのに誰も(数人いたのに)気づいた人はいなかった。  
そこへ善治郎氏が来て「これは何だ!!」と言ってスコップで  
その布をかぶったところ足が見えた、カチカチに凍死した兵士  
が現われた。我々数人が6メートル程離れて、その時の  
様子を見えたのではっきり記憶に残っている。  
兵士の顔は20才過ぎ位の若者の顔であった。  
この時、氏家はる氏も一緒に見えた。  
もし、この時夏の季節であったら生きていたかも知れないと思っていた。  
12体は我が数回もこの山に軍事研究者が降りた/2名である。

加した氏家はるさん(私より3才上)  
まさりの女性であった。  
傘の布をかぶってうずくまっていた兵士  
しそうなったのを支えてやった記憶が  
のような、若者の顔であったからだ。  
一いさざらけと思っただけである。



## (2番機)

戦後、1年が過ぎた頃からアメリカの進駐軍が四輪駆動のジープで頻繁に横川にもくるようになった。そんな初夏の頃だったと思うが進駐軍の要請で2番機の墜落現場の調査が行なわれることになった。

宮城県警察本部から七ヶ宿村役場を介して消防団（戦中は警防団）にその協力要請があったと聞く。消防団員と地元関係者 20 数名からなる調査団が編成された。

朝8時横川を出発、約3キロメートル先の「八寸角」で休憩をとった。そのとき兵士が突然拳銃を取り出し、川原の石をめがけて1発撃った。どうして発砲したのかその真意は不明だ。興味本位で撃ったと思われる石の所に行ってみた。弾は少し窪んだ所に当たらしく弾丸がめり込んで半分つぶれた状態で止っていた。そのつぶれた弾丸を見て拳銃の威力を知ったのである。

八寸角から先きは細い山路となり1列になって歩くことになる。暫らく行くと大若沢の沢へ出た。そこからは沢登りとなる。先頭で登るのは地形をよく知っている村人と消防団員そして兵士と続く。沢の水が少なく比較的容易に登れたが、現場に近づくにつれて急峻で危険を伴うような岩登りとなる。暫らく登ってゆくと、ヒコーキの破片があっちこちに点在するようになった。しかし、沢のどこにも墜落現場らしいところは見当らない。すり鉢状の底に当たるところなので残骸と大量の瓦礫の崩れで、まるでトラックが埋っているかのような状況であった。消防団員からここは最終現場である旨、説明があり、実際に激突した所は急な斜面の数10メートルも上方の岩場であるということだ。しかし、その辺りにも何一つ残骸らしきものは確認できなかった。

(私なりに推測してみると)

激突した場所は、冬には多量の雪が吹き溜るところで、6月になっても融けずに残り、ちょうど山羊の形ちに見えるところ、その形の変化を見て村人は雪融けの様子を知る手掛りとなっている。

3月10日にはかなりの残雪があった筈、恐らく激突によって大量の雪と瓦礫のなだれが発生し、すべてが谷底に埋ってしまった、と考えられる。

昼食のとき、兵士がちょうど私の目の前で腰を下ろした。どこで見つけたのか、焼夷弾を岩場に固定し、腰の拳銃を抜いてその焼夷弾の中央部を撃った。簡単に撃ち抜いた。ナップザックから缶詰を取り出し、撃ち抜いた穴のところにライターで火をつけ、その缶詰を温め始めた。

やがて側面に付いている缶切りを指で廻しねじりきって簡単に開けた。中は仕切られ、スパゲティが入っており、他の半分にはフォークと細長いソーセージか菓子のようなもの2～3個とガムが入っている。1缶がひとり分の昼食ということのようであった。腰の水筒の水を飲んでたばこに火をつけた。非常に興味深く観察させてもらった。兵士の朝からの一部始終を注視し、いろいろなことを学んだのである。

帰りはもとの沢を下だててなんとか無事に八寸角まで戻った。

(3番機)

1番機・2番機は3回登ったが、3番機は1回しか行っていないので記憶がさだかではない。特に印象に残っているところをまとめることにする。不忘山の西側で空沢の上流に当るぶな平はやゝなだらかな登り斜面になっている、その上方の少し明るくひらけたところが墜落現場だ。

終戦の翌年、7月頃だったと思うが知り合いの仲間達と5人で、初めてぶな平の墜落現場に登った。その現場に着いて最初に目についたのは、下方の原生

林の、ぶなの大木の梢が、4発のプロペラで切り取られたらしく数10メートルにわたって平らになっていたことである。

現場には機体の残骸が折り重なるように散乱していた。周りの木の枝、高さ数メートルのところには布切れやビニール、ジュラルミンの破片などがあちこちの枝にぶら下がっている。当時の3月10日ごろには残雪が2メートル以上あったと思われる、そのため雪融け後に枝に引っかかったものと考えられる。

林の中にはゴロゴロした大・小のモーター類や墜落の衝撃で破れた残骸が広範囲に散乱していた。

遺体は既に集めて埋められていたと聞く。携行品などのめぼしい物は殆ど無くなっており、何一つ持ち帰るものはなかったのである。

現地までは遠いので帰りの時間を考え早目に下山したので詳しくは見届けることはできなかった。

(付記)

後日、残骸の解体と運搬できる大きさに整理する作業を現地に泊り込んで3人でやる仕事を1週間の予定で要請されたが「危ないからやめなさい」との母の反対で参加しなかった。もし、参加していればかなり詳しく報告できたと、今にして思うと残念であった。

## 3. 特筆したい思い出

## (1) 軍司令部が回収した貴重品

墜落後から大掛りな調査が何回も行われた。軍司令部の宿泊と休憩所に我家が指定された、また県警察本部の宿は二瓶勝夫様宅であった。軍の命で回収した貴重品のうち特に印象に残っているものを次に列記する。

品名	内容と説明
拳銃	真新しい皮のケースに入っていて、未使用（弾は装填されていなかった）とのこと。憲兵隊員が厳重に管理し持ち帰った。
双眼鏡	皮のケースに入った真新しいもの、軍の関係者が外へ持出し、これで遠くを見てみな！と声を掛けられた。長老湖の方をのぞいてみた。約1.5キロ先のすすきの穂が風でゆれているのがはっきり見える。 やゝ大きく重かったが、遠くのものがこんなにも近くに見えるのには本当に驚いた。
空撮カメラ	両サイドに取っ手が付いたカメラで両手で持って上空から下界を撮る専用カメラ、ズームもできる極めて高性能カメラとのこと。これも皮のカバンに納められていた。
賤布	やゝ大きいサイズで中にはドル札と日本のお札数枚が入っていた、そして日本の女性の写真が2～3枚程入っている。多分、沖縄の女性だろうとのことであった。服装はワンピース姿であった。

そのほかにも数点あったが具体的内容の確認がとれなかったので詳細に報告できない。

## (2) 人命の大切さを学ぶ

仙台にある軍の研究所（正式名・不明）から技術者2名が我家に投宿し、警防団員数名と朝早くから1番機に登り選別したものを運ばせた。その中でも特に印象的な優れものを次に報告する。

### 〔救命ボート〕

海に落ちたとき助かる方法として救命ボートがある。ちょうど背のう位の布製バックにセットされていて着水すると自動的にエヤボンベ（ペットボトル位）から圧縮空気が送られ数秒で一人乗りボートができる。

付属用具としては、風雨を防ぐ上半身用カップ、移動用の帆掛三角布、食料の缶詰、飲料水、釣り具一式、サメ撃退用赤色染粉、医薬品ケース、救助を求める太陽光反射鏡（赤十字を表わす反射鏡）などが備えられている。

人命優先を考えるアメリカの用意周到のやり方に感服した次第。

### 〔自動発信器〕

万が一地上に降りたとき、自動信号発生器により S・O・S の信号を自動的に発信する仕組みになっている。電源は手廻し発電機により、直流（D.C）350 ボルトと 16 ボルトの2系統の電圧を同一回転子にそれぞれ2種のコイルを巻いて両サイドの整流子から電気を誘導するという一般には想像もつかない極めて珍しい発電機である。発信部は壊れてないが発電機は無傷であったため、大いに電気実習に役に立ったのである。

### 〔酸素ボンベ〕

墜落現場にはジュラルミン製の提灯のような丸いものがゴロゴロと幾つもころがっていた。後でわかったことだが、これは酸素ボンベであることが判った。通常は酸素を必要としないが、成層圏のような高い高度で飛行するときには必ず必要となるものらしい。軍関係者の話によると。

(例えば)

地上からの激しい対空砲火を受けた時とか、戦闘機などの追撃をかわす時など、安全を確保するため急上昇して成層圏（1万メートル～1万3千メートル）へ上昇し撃墜されるのを防ぐなど戦術的方法としてアメリカ空軍が行った方法らしい。また、偵察で空撮のとき等、安全を確保するため1万メートル以上の上空から下界を撮って偵察を行なったとか、酸素を装備していない日本の小型ヒコーキ等は追撃することは不可能とのことである。この酸素ボンベの直径は約40センチもあり圧力に耐えるため螺旋状の補護帯が施されていて、軽量で丈夫な装備となっていた。

【その他付属装備】

・冷房、暖房用装備

機内全体を冷房するのではなく、配置された任務の場所で各自が扇風機によって冷房を確保するようになっていたらしく、数台の扇風機が回収されている。また暖房用にチョッキが使われた。成層圏飛行とか寒冷地での暖房に、綿入れチョッキに断熱線を縫い込んだもので各自の任務席に備えてあるコンセントに接続して使用する。

・夜光腕時計

文字盤が夜光性のもの。時刻を知るだけでなく、どこの地方の時間でも知ることのできる時計らしくやゝ大きい腕時計であった。

・人名認証腕輪

銀製のクサリと銀の文字盤からなる腕輪で登録記号とナンバーで所属部隊や名前などが判るようになっている。

※以上は実際に手に取ってみたものだが記憶がさだかではなく詳しくはこれ以上は記述できない。

#### 4. 技術力の高さに惚れて

##### ①ネジの種類

ヒコーキに使われているネジは全て+ネジである（当時日本製品は-ネジ）。回転や震動でネジがゆるむのを防ぐため、ネジの頭をかしめてある。かしめが出来ない薄い金属板は、ネジの頭に穴の開いたネジを使用し針金を穴に通してネジ同志を結んでゆるむのを防ぐ方法である。

また、ネジをしめる時に使用するワッシャにもゆるみ止めとして、内側または外側にギザギザ模様のすべり止めを施してある。

当時としては非常に珍しかった。日本ではまだ使われていなかった時代である。

##### ②ボールベアリングの種類と構造

モーターや回転する装置の軸受けには必ずベアリングが使われる。用途によってはボールベアリングのほか棒状ベアリングなど、さまざまな構造のものが使用されている。精密機器に使用されているものや空気圧によって高速回転させる時のベアリングとか興味は際限なく広がった。大きいものは最後尾の窓に固定し後方に向けられている機関砲台の回転軸受けに使用されているのが直径が30センチもある、小さいものは直径が5ミリ位のものも数多くある。大きいものは処分したが小型モーターなどに使われているものは大切にとってある。

## 5. 焼夷弾

○焼夷弾の長さ約 50 センチ、六角柱で径が 7～8 センチの筒状になっていて中にはグリース状のドロドロした油がガーゼに包まれた状態で入っている。全体の重さは約 3 キロ。この焼夷弾 19 本を束ねて 1 セットにしてあり、ヒコーキから投下すると 200～300 メートル降下したとき、中心にセットしてある爆薬が風圧によって自動的に破烈し、19 本が空中でバラバラに飛散する。同時に中に入っている、グリース状の油も勢いよくとび出し、それに火がついた状態で落下する仕掛けになっている。

○昭和 21 年春、警防団員による実験が実家の近くの田んぼで行われた。幸にもその実験に立合う機会を得た。広い田んぼの端に焼夷弾を 45 度角に固定し、筒状の下方についている信管を金属の棒で強くたたくと、破裂音とともに中に入っているドロドロの油に火がついた状態でとんでゆく。約 20 メートルほど飛ぶ、火を消そうと水をかけるが簡単には消えない。プツプツ音を発しながら 30 分間は燃えている。

○この焼夷弾の構造を実際に見ることができた。筒の下方にセットされている信管の部分は直径 2.5 センチ位のネジ込み式になっているのでこの信管部分を左に廻して取りはずすことができる。中には火薬が（小学生が使う消しゴム位の大きさ）引火性の高いセルロイドのケースに粒状の火薬が詰められている。その火薬 2 個が発火によってグリース状の油をとばす爆薬になっているのである。



## 6. B29 から学んだもの

○雪融けの6月、軍の命で残骸の解体と運搬が始まった。横川の人達だけでなく、近郷の人達も動員されケッチャグラの沢にかかる橋のたもとまで運ばされた。

私も7月頃に運搬に参加した。運んだのは電動発電機、重量は12~13キロあり、下り坂続きの悪路のため荷縄が肩に食い込んで大変であった。

集荷所には運ばれた残骸が既に山と積まれていた。その中に無傷の電動発電機が3台程積まれていた。

### ○電動発電機

積まれていた電動発電機が欲しくなった。それは我家にあったものは傷だらけで解体不可能だったため、どうしても分解して中の構造が知りたかった。翌日集荷所まで行って、どうにか手に入れることができた。早速分解して中の構造を調べる事ができ大いに参考になった。かくして電気に関して一層興味が湧き、もっと高い専門知識を得たいと考え進学することを決意する。昭和28年高校を卒業の翌年、単独で上京し、民間の三畳間を借り自炊しながら理系大学に進み念願の電気工学士の資格を得て今日に至っている。

#### (参考)

直流電圧を必要な電圧に変換する方法として電動発電機がある。直流電圧でモーターを回し、同軸になっている直流発電機を回転させて必要な直流電圧を発生させる装置のことで「モーターゼネレーター」という。

これに対して交流電圧の場合は変圧器一台だけで必要な電圧が簡単に得られるのが特長だ。

## 7. 私とB29との接点

仙台にある軍の研究所(正式名は不明)から技術者2名が我家に投宿し、警防団員数名と朝早くから1番機に登り現場で選別したものを運搬に当らせた。

その回収物は我家の緑側に置かれ3日間で相当量のものが集り上げた。夜になると技術者達は回収物をさらに選別し分解してかまぼこの不要なものを取り除く作業を行った。整理されたものは後日研究所へ運ぶ予定になっていたのである。座敷いっぱいに広げさせる作業は14歳の私にとって初めて目にすることが出来た。時間経過を忘れて見入っていた。

どんな珍しいものがあつたか記憶をたどりながら少し紹介すると、

### (1) 落下傘

布製バックを取り出し家族数名が見ているところで説明を始めた。

ナイロン製の紐を引張ると、かたどきと音がして直経が80センチ位の糸は落下傘がとれた。それに1メートル程の紐がついていて空中で落下傘を引張り出す役目をしていそうだと。18畳敷きの座敷いっぱいに出てきた落下傘にナイロン製の長い紐24本がついている。

話には聞いていたが本物の落下傘に触れる驚きの瞬間であった。暫くして技術者が母に向って「せめて紐だけでも何かの役に立って下さい」といつか後始末は困るであろう落下傘の布の山に手を触れさせられたがようやく緑側の片材にうす薄く置かれた。

4~5日後、隣り近所の石臼屋さんが我家に集まってくる。"いとむき"という布年寄りの遊戯が始まった。どうやら母の発案で24本の紐を使って"糸引き"という昔田舎で(下や)た遊戯だった。見ているとたまに面白い遊戯で深夜にたずさることもよくあったという。

## (2). 救命ボート

背の位の布製バックに付けてセッティングして海に着水すると自動的に  
 エアポンプ（オートボイルサイズ）が作動し圧縮空気が送り込まれて数秒で一人乗りボート  
 ができ上がる仕掛けになっている。付属用具としては帆掛け用のアルミ製支柱がスルス  
 と伸びて1.4メートル位の高度でカッターと支柱が固定される。  
 必要用具としては、風雨を防ぐ上半身用カッパ（ボート内止み具で固定する）・食料缶詰類  
 ・飲料水・医薬品（防水用ケース入れ）・釣リ具一式・サメ撃退用赤色染料・赤字塗料  
 太陽光反射鏡・小物入れケース等々。

四畳半のつばいを広げられた2人ボートは、最後にエアを抜いて仙台へ持ち帰った。

## 8. 終戦

間もなくして8月15日終戦となった。集められた残骸が若干残されたままと  
 なってしまった。数ヶ月後、進駐軍が横川に頻繁に乗りこようとするので、B29の品物を  
 持ってくるに「何をどうにかかすの!」とこのうかつがななまった。心配性の母から  
 「そんな危険なものとはどこかに持っていく捨てておいて」と強く迫まされた。  
 そこで母屋から50メートル程離れた初蔵に全部を移した。初蔵には  
 どうしても捨てがたいものばかりであった。冬の間中電気も暖房もないうす暗い  
 初蔵の中で残骸を分解したり組み立てたり取ったり取ったりして残骸を  
 いろいろと遊ばす日が多くなった。

この事が異常なまでに電気・機械に興味を掻き立て我が人生を決定する岐路で  
 あったことは確かである。即ちB29との接点こそが我が命のうねりである。  
 今日まで思えば楽しくも懐かしい思い出深い学問の館であったと  
 いうことになる。

9. 私見

(1) 3機編隊飛行であった

(理由)

a. 3機が平行飛行していること、それは1番機の垂直尾翼の方向と3番機がぶなの木の梢えを4発のプロペラで切り進んだ方向がほぼ一致していること。

b. 2番機が最初に墜落、<sup>(1.1)</sup>数秒後に1番機が墜落したと考えられる。それは爆音が最初左側から激しい爆音で聞こえた。続いて<sup>(1.2)</sup>数秒後低い爆音がこんどは右側から聞こえたことによる。当夜は強い西風が吹いていたので音の強弱と方角によっても飛行経路の位置関係が明確だ。

c. 爆音を聞いた方向と、佐々木<sup>(1.3)</sup>氏が聞いたと言っている方角が一致している点である。また3番機については爆音は乙森山(蛤山)にさえ切られて正確な位置関係はキャッチできなかった。

しかし、墜落現場の位置関係から見ても、3機は平行飛行であったと推測できる。

d. 3機とも同じ高さのところで墜落している点である。山の標高から推定すると、そのたかさはおよそ1,500メートルとなり、3機編成で飛行していたと推測できるのである。

(2) 沖縄<sup>(1.4)</sup>の空軍基地への帰還中の事故

(理由)

a. 3機とも弾薬を積んでいなかった。焼夷弾は多少あったが、空爆に向うほ

どは積んでいなかった。そのことから見ても、目的を持った飛行ではなく東京大空襲に参戦した後の帰還中の事故であったと考えられる。

b. 当時、東北地方にはかなりの残雪があり、当夜は特に吹雪であったので空爆の出来る条件ではなかった。従って、目標とか目的を持って飛行していたとは考えにくいのである。

c. アメリカ空軍の命令で東北地方を飛行するなら、山脈（蔵王山 1,841 メートル）の地形から見ても、高度は 2,000 メートル以上で飛ぶよう指示される筈。100 機以上による東京大空襲・空爆が行なわれたにもかかわらず 3 機のみが目的もなく東北地方に飛来したとは理解できないし、軍務の観点からみても正当な飛行ではなかったのではないかと思わざるを得ない。

(3) 高度は 1,500 メートルか？

(理由)

a. 東京大空襲時の高度は 1,000 メートルの低空飛行で空爆を行ったと一般に報道されていたが、墜落した現場の高さから推定すると空爆の高度も約 1,500 メートルであったと推定できる。もし、東北方面経由で帰還する前提だとしても 2,000 メートル以下で飛行する筈がないからだ。恐らく空爆した時の高度そのままの高さでとんで来たための事故であると考えざるを得ない。

b. 以上の情報を総合すると、昭和 20 年 3 月 9 日夜半の首都東京の空爆には、沖縄以外の方面部隊からの参加隊員もあったと聞く。その混成された空爆隊で当初の目標通り、市街地を焦土化することに成功し、初期の任務を無事終えた、

という安堵感と参加隊員の労をねぎらう謝意の気持ちを表わす意味で東北方面  
経由で帰ることの申し合わせにより、高度を変えずに北上したため、飛行進路  
に立ちはだかる不忘山に激突墜落したものと推察できる。

以上

以上、B29 の墜落事故に関する報告とします。

もう 70 年も前のことで記憶もさだかでなく、修正、削除などもあると思  
いますが少しでも参考になればと、取り急ぎ報告いたします。

平成 27 年 8 月 30 日

平成 28 年 2 月 28 日 修正追加。

平成 30 年 2 月 10 日 修正追加。